

編集委員会

編集委員長 石 丸 圭 荘
編集委員 下小野田 一 騎 (医学) 石 井 孝 法 (教養)
源 裕 介 (理学) 松 本 揚 (整復)
越 智 美 智 子 (看護)

編集後記

この度了徳寺大学研究紀要第17号の発刊に御尽力いただきました教職員各位に深甚の謝意を表します。
さて、ここ最近学会や論文で発表される知見において「昔と変わったな…」と思うシーンは皆さん無いでしょうか。私は10年以上整形外科領域の理学療法に関与しておりますが、近年この分野における理学療法の様変わりに少々驚いている状況にあります。私が理学療法士（以下PT）になり立ての頃、超音波画像診断装置（以下エコー）が評価や理学療法に使用されるなど思ってもみないことでした。私の師匠である林典雄先生（運動器機能解剖学研究所）が、私が臨床2年目の時にエコーを用いた評価について、初めて学会の場で披露されました。その時は、「解釈ができない画像・動画をいくつも見せられている…」という感覚でした。しかし、これは触診技術および解剖学的な知識が応用されることによって、エコーで見せられる動画・画像を解釈できることに気づきました。また時を同じくして、整形外科領域の医師がエコーを手に取り評価・診断を盛んに行うようになりました。その技術を駆使し、医師とPTによって様々な評価方法及び治療方法が研究され、世に放たれるようになりました。これらの現象が起きてきたのがちょうど最近の5年程度だと思います。その頃、本学にもエコーが11台導入され、私もその流れに乗ろうと必死に様々なことを調べ、また臨床で何度も評価・治療にトライしました。おかげで私自身ここ数年様々なものを得ることができました。とある大学の有名な整形外科医の先生が「いずれ整形外科に携わるPTが皆エコーを手を持ち、医師と情報共有しながらレベルの高い理学療法を患者に提供する現実がすぐそこに迫っている」とおっしゃっていました。権威ある医師が我々PTの技量を認め、共に手を携っていこうという現実「大変だ…」と思う反面、PTへ期待を寄せられているこの状況が楽しくてしょうがないという気持ちでした。このような色々なものが大きく変化しようとしている状況に身を置けることに、私は常に奮い立つ思いになっております。

整形外科分野の理学療法同様に今も進化を続ける了徳寺大学研究紀要ですが、今後ますますの発展をと
げ、いつしか「了徳寺大学の紀要は常に最新のものを発信して非常に興味深い」と臨床・研究に携わる者
に言ってもらえる、そんな紀要に発展することを切に願っております。

（源 裕介）

了徳寺大学研究紀要 第17号

発行日 令和5年3月31日

発行人 学長 山之口 美喜生

発行所 学校法人 了徳寺大学
〒279-8567 千葉県浦安市明海5丁目8-1
Tel. 047-382-2111

印刷所 株式会社アイモス
〒761-8031 香川県高松市郷東町792番地9号